ASLE-Japan ／文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

July 4, 1999, No. 8

絶望から再生的希望へ：

失われたものは、今、どこに生きているのか？

---1999第3回ASLE-U.S.大会報告---

渡辺信二（立教大学）・山城　新（ネヴァダ大学リノ校大学院）

第３回ASLE-US大会は、"What to Make of a Diminished Thing"というタイトルの下、ミシガン州カラマズーのウェスタン・ミシガン大学で1999年６月２～５日の４日間にわたって開かれた。このタイトルは、ロバート・フロストの「オーヴン・バード」の最終行から採られた。因みに北アメリカ原産の鳥オーヴン・バードは、地面にオーヴンのような巣を作るので有名であるが、その鳴き声は、「ティーチャー、ティーチャー」と聞こえるという。

本大会の会場となったウェスタン・ミシガン大学は、1903年に設立された州立大学で、27,000人の学生数を誇る研究中心の大学である。また、同大学が位置する小さな町カラマズーは、インディアンの言葉を語源とするが、その原義は失われている。「沸き上がる水」というのがほぼ共通の認識となっているが、「幻」とか「反射する水」とも解釈されるらしい。町と名前を共有するカラマズー川は、外見はとても美しいが、製紙産業によって水が汚染されて、現在、環境保護団体が監視を続けているけれど、依然として汚染された川の上位にリストアップされているという。

WMUキャンパス

英国、オーストラリア、タイ、日本など海外からの参加を含めて、予め登録した参加者は、約340名を数えるので、実際の参加者は、380名ほどであろうと推測される。発表者・司会者数の総計は、延べ数で410名を越える。朝８時から夜９時まで続く本大会には、全体会が６セッション、朗読会が２セッション、分科会が１０セッションあり、分科会のセッションはそれぞれ、ほぼ１０の発表が同時に行われた。さらに、フィールド・トリップが１７ほど、全ての午前と午後に用意されていた。

（詳しくは、第３回ASLE大会プログラム: http://www.asle.umn.edu/conf/asle_conf/1999/conf99.htmlを御参照下さい。）

この大会での注目すべき点、評価すべき点をあげれば、市民としての権利を行使するだけでなく、その責任もまた果たそうとする積極的な姿勢が見られたこと、大会のテーマを参加者各おのが多義的、プラクティカルに担っていること、教師としての自覚が高いこと、参加者がほとんどそのまま発表者であること、リーディングが多いこと、とりわけ、詩の評価の高さ

1998年度ASLE-JAPAN 第４回全国大会を振り返って

村上清敏（金沢大学）

昨年１０月１８日、１９日の両日、広島市においてＡＳＬＥ－Ｊａｐａｎ第４回全国大会が催された。「大会実行委員」を勤めさせていただいたものとして、大会を振り返っておきたいと思う。大会の内容は１８日午前のエクスカーション、同日夕刻からの役員会ならびに懇親会、１９日の総会、研究発表、シンポジアム、講演会であった。それぞれについて、切れ切れになりつつある記憶の糸をたどってみよう。

１８日朝、二日酔いの頭を抱えつつ、「大会実行委員」としての責任感だけに駆られて、タクシーを飛ばして船着き場へと急いだ。ベンチで横になりながら、船の揺れの少なからんことを祈っていると、約束通り、赤いバンダナを（さすがに、頭には巻かず）手に持った加藤氏が到着。安心して、再び横になっているうちに、参加者が続々と到着して……、と書きたいところだが、結局、参加者は外国人女性3名を含む総勢6名。なごやかなうちに、１時間足らずの船旅を、無事楽しんだ。

夕刻、アメリカ文学会のシンポジュームを抜け出して、懇親会会場へと急ぐ。広島大学大学院の学生諸君のてきぱきとした準備ぶりに、目を見張る。役員会は懸案事項を幾つか抱えていて、少々時間をオーバーした。野田代表が事前に事務連絡を頻繁に取って下さっていたが、３０分という短時間では、やはりきつかったようだ。引き続き、横田氏の司会で、懇親会。こちらの方は、当日の飛び入り参加もあって、大盛会であった。懇親会終了後、二次会に流れる人たちからの誘いをきっぱりと断り、まじめに、翌日のシンポジュームの最終打ち合わせをおこなう。（にもかかわらず、シンポジューム司会者の側に遺漏が多かったことは、当日、フロアでご覧いただいたとおり。）

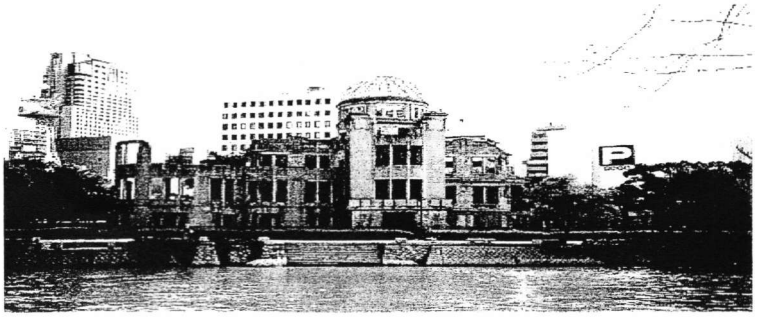
[ASLE-US大会] と、科学的なデータの重視などであろう。以下、具体的に、各セッションを紹介しよう。

初日は、開会式・歓迎挨拶を兼ねた全体会が、夕方８時から、詩の朗読を含めて行われたが、ネクタイをしている者は１名ほどで、ほとんど全ての参加者がカジュアルでラフな服装であった。もしも、外見が内面を表現するのなら、アズリーの参加者のほとんどは、屋外での活動を好む、身体的にも精神的にも健康な人びとなのだろう。こういう言い方をすると誤解を受けるかもしれないが、とにかく自然が大好きな人たちであり、単なるアウト・ドアー派から、アーム・チェアー自然派、環境問題の活動家に至るまで、幅広い人びとを集めていた。ただし、依然として、黒人を含めて少数民族系の参加者は少ない。

本会第２日目の全体会、「原野、希望、そして、遺産」と題されたジョン・エルダーとスコット・ラッセル・サンダースの朗読は、参加者の注目を集めたものの一つであった。サンダースは、最近の作品*Hunting for Hope*の中から、ハイキングでの息子との会話を中心にした冒頭の章を一部朗読したが、その会話から、現代社会に対する自分の絶望が、息子の希望までも奪っていたということを悟り、自然や原野（Wilderness）、共同体に関する今までの視点から少し方向を転換し、後続する世代へ、いかに希望を継承していくかについて明晰に、そして感動的に語った。

J. Elderと筆者渡辺氏

"Imaging the Earth" で早くからフロストなどの詩についてエコクリティカルな考察と私的な散文を見事に調和させ、ナラティヴスカラシップの分野での第一人者であるジョン・エルダーは、最近の著作*Reading the Mountains of Home*の後半の章から朗読を披露した。フロストの詩に自身の故郷ヴァーモントを重ねあわせ、生態地域中



元安川からの眺め

１９日朝、会場のアステールプラザに向かう。昨夜はいつも通りの就寝時間であったので、心にも余裕があるのだろう、通学の女子生徒の姿がまぶしい。短時間のうちに会場の設営に迫られ、ここでも大学院の学生諸君の活躍ぶりには、頭が下がる。伊藤氏も両手にポットを抱えながら駆けつけて下さり、学生諸君に適切な指示を出しておられる。

恐縮する。いよいよ研究発表が始まる。用意した部屋が一杯になるほどの大盛況で、大感激。でも、こちらはもっぱら、時間の延長ばかりが気になり、廊下で、質疑応答の短からんことを祈っている、といった状態であった。シンポジューム、講演会と、時間をやりくりしながら何とか無事に進行し、大神田氏の閉会の挨拶が終わった時には、正直、ホッとしたというのが実感であった。

「大会実行委員」として反省すべき点としては、以下の２点に絞ることができるだろう。

１）事務局、地元会員の方々との連絡を密に取るとともに、責任分担を明確にする。

２）時間に追われることのないよう、会の開催時期を含めて、さまざまな可能性を検討する。結局、「大会実行委員」とは名ばかりで、実際におこなったことと言えば、同僚の生田氏に手伝ってもらいながら、プログラムを作成したこと、当日、廊下で時間を気にしながらうろうろしていたことぐらいであった。申し訳なく思うとともに、大会準備に奔走して下さった方々、講演の飯田先生はじめ研究発表、シンポジュームをおこなって下さった方、遠路はるばる会場にお越し下さった方々に、深く感謝したい。

[Photo by Karen Colligan-Taylor]

心主義（bioregionalism）的に「場所」について一連の考察を加える彼の試みは、あらたなエコクリティシズムの流れに影響を与えている。ジョン・エルダーとスコット・ラッセル・サンダース両者とも作家、学者、教師、父親としてだけでなく、社会の一員として、いかに自然との関係を追及していくかを見事な散文を通して説いた。ある意味で、この学会の大きなテーマを体現していたと言えよう。

同じ日のデイヴィド・オーによる講演「失われたものの再生」は、彼の勤めるオベリン大学におけるキャンパス建築プロジェクトについてであった。詳細は、同大学のホームページを参照していただきたいが、建築のもつ美的価値とその効率性や機能性を、どう、エコロジカルな意識の育成と教育に貢献させるかという彼の演題は、これまでの彼の作品*Ecological Literacy* (1992)や*Ecological Earth in Mind* (1994) などがそうであったように、「建築は教育」というテーゼを如実に反映し、聴衆をかなり刺激したようだ。彼独特の環境学は、常に新しい視点を提供してきたが、この講演で使われたEcological Industry、Ecological Engineering、Sustainable Agricultureなど、学際的かつエコロジカルな概念は、新しい産業と教育の先導的分野として、大学に組み込まれることを予見させた。

エドワード・アビーに関するセッションは、２つ設けられていたが、セッション1.8「エドワード・アビー１」では、デヴィット・フェニモア がアビーとゼン・グレイとの関係をアメリカ西部文学の伝統に照らし合わせて論じ、最終的にはアビーの黙示録的レトリックがグレイの影響を強く受けたものではないかと結論付けた。山城新（ネヴァダ大学大学院）は、アビーのコロラド川下りのエッセイについて、しばしばジョン・ウェズリー・パウエルの風景描写と自らの実際の川下りの経験が比較検討されている点をナラティヴスカラシップの観点から分析し、アビーとコロラド川、そし

[ASLE-US大会] てパウエルの影響などを論じた。

セッション3.3「アジアにおける環境関連著作」は、振り返ってみると、最も刺激的な発表であった。加藤貞通による藤前干潟保全運動と万葉詩についてのエコクリテカルな論評は、ジャパニーズ・ネイチャーライティング研究の最近の進展を十分に示した。加藤は、仏教思想と散逸構造理論に言及しつつ、エコロジカルな循環、社会的循環、心的な循環、の三つの循環の流れを妨げないことが重要であるとした。

台湾から参加のチャン・チャン・ツェングの発表は、ジャパニーズ・ネイチャーライティングを確立する上で示唆に富むと思われる。ツェングは、台湾のネイチャーライティングが、中国の植民地政策に対する反発として、更にポストコロニアリズムの枠組みのなかでの台湾人アイデンティティーの確立の為に、重要な役割を果たしていることを強調した。発表後に続いた、かなり活発な質疑応答は、ほかの聴衆にもこの発表が刺激的だったことを示しているが、中でも、ジョン・エルダーの質問は、今でも頭に残っている。正しい引用ではないが、アジアのネイチャーライティングにとって西欧の伝統がどのように有効なのか？　つまり、ポトモダン的なパスティーシュの時代の中で、どれだけアジア的なものを留めつつ、アジア的ネイチャーライティングを発掘し、創作していくのか？
次回の学会において、この分野における更なる発展を期待したい。

自然環境文学の分水嶺と目されるソローについては、セッション4.8で、彼の重要性が再確認された。上岡克己（高知大学）は、エコロジーの考えかたが見られる「ハックルベリーズ」において、ソローが環境への一般の態度に変更を迫ったと指摘し、トム・ヒラードは、ソローが肉体的な喜びを拒否しつつ、自らのなかの獣性と精神性の結びつきに着目している点を検討した。

またセッション4.9「ヴィクトリアンと自然」におけるアンナ・フォード（甲南大学）のハーディ論は、人間社会の記述にちりばめられている生物学的隠喩、自然界の記述に用いられる擬人化的隠喩が複雑に政治的色あいを帯びて交錯する様を追求するものであった。19世紀英文学中の自然についての研究はすでに高度なレベルにあることを印象づけた。

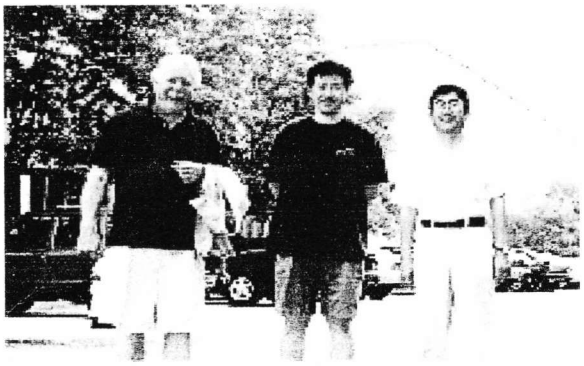
第2日目の夕方から、懇親会が盛大に開かれた。ここで、アルコール類は懇親会費に含まれておらず、飲みたい者が個人で仮設のカウンターから買うことになっていたが、これは、合理的な発想だと思える。ついでに言えば、大会が開催されている間は常に、受付けが開かれており、参加者の質問に答えたり、便宜を図っていた。

懇親会後に開かれたウェンデル・ベリーによる講演は、もっとも参加者の関心を集めていたようだ。彼は、まず、シェイクスピア『リア王』の中のグロスターとエドガーの関係と、絶望から希望へ移行する彼等の過程に焦点を当てながら、その構図を人間と自然の関係に見事に比較させ、そのあと、自然理解における科学的知識の重要性において、エドワード・O・ウィルソンなどに触れながら、最終的には、彼の一貫したテーマである「場所」あるいは「土地」について人間の所有妥当性（propriety）を論じた。多くは彼の著作に既に語られてはいるが、語り口から溢れる人柄などを含めて、彼の存在感は、印象深く感動的であった。

第3日目のセッション5.5「国際詩のリーディング」における2人の詩人は、それぞれの作品が興味深い対照を表していたように思う。イギリス出身のテリー・ギフォードは、その山岳についての詩作だけではなく、イギリスにおいてエコクリティシズムの先導的役割を果たしている学者としても有名である。彼の詩は、イギリス・ロマン詩の伝統を基盤としながら、時おり、アメリカのネイチャーライティングや俳句の影響を受けたような折衷性をみせる。

渡辺信二（立教大学）の詩は、最近*ISLE*にもいくつか発表されたように、次第にアメリカでも注目されて

いるが、ギフォードや他のアメリカの自然詩と比べて顕著な点は、詩的感受性と私的表現性の交感である。一般的に自然詩と言われるものは、エマソンのエッセイ「詩人」に見られるように、自然自体と精神的、芸術的な啓示の自由な交感性をしばしば見せる。A・R・アモンズなども、その交感性をおそらく基盤にしていよう。しかし、渡辺の詩は、自然に必ずしも縛られていない。それよりも自然という「概念」、つまり、人間の中で更に二次的なものに変化した「自然」との私的な経験を重視しているように思える。それぞれの伝統と文化によるのであろうが、ギフォードと渡辺二人の詩人は、アメリカン・ネイチャーライティングにはなかなかみることのできない多様性を見せてくれた。



Tom Bailey氏とHadlley Hall 前で

"The Ecology of Eden"で知られるエヴァン・アイゼンバーグは、三日目午前中の全体会で、聖書学的観点から現代の社会に潜在する「エデン神話」について論じた。アイゼンバーグによれば、人間は、自然に対していくつかの誤った前提を持っていた。一つが、自然とはそれ自体で成り立った自律的でバランスのとれたシステムであるという誤認、もう一つは、テクノロジーによって全てをコントロールできるという傲慢さ。しかし、自然は、非常に多様かつ複雑で混乱しており、エデンの園のような自然と人間が完全に調和した状態というのは神話に過ぎない。もちろんそれは、自然と人間の共存というのが不可能というのではなく、アイゼンバーグは、都市空間を一つの理想的モデルとし、その可能性を説いた。最近人気のある「混沌理論」（Chaos Theory）を駆使しながら生物学・農業などにも触れ、更に、先述のデイヴィッド・オーのプロジェクトにもエデン神話が隠れていると柔らかく批判した。

セッション6.1「環境に関する文章作成の教えかた」は、教育者としての自覚を明白に示していた発表のひとつである。発表者３名が共通して強調したのは、自然をトピックとした文章作成を学生たちに課すメリットである。個人的な経験を表現できること、ガン・コントロールやアボーションなどのトピックと違い、自分の主張を科学的なデータで証明できること、家族のなかでの会話を刺激することなどが評価され、その結果として、市民意識を育て、単なる自然への愛を持つだけでなく、その愛の共有さえも視野に入れることができると指摘された。

セッション7.6「エコクリティカル理論」は、発表がバラエティー富み興味深かった。ジャック・ラカンの精神分析的解釈に基づいてアネット・コロドニーの*Lay of the Land*の再読を行ったマシュー・ボリンダー、ベイコンやデカルトなど西洋初期モダニストの思想をエコ心理学的に再考したラリー・W・リグズは、アプローチは類似していたが、それぞれの論点が見事に対照をなしていた。特に「自律性」の問題に関して、ベーコンの思想をリグズが弁護した点は、エコクリティシズムが西洋近代の批判から発展したというこれまでの流れに一石を投じる試みであったように思える。同じセッションのダニエル・D・ブレンは、最近ネイチャー・ライターとして再読されているフロストを、「超絶主義」の伝統、特にエマソンとの関係で丁寧に、しかし、批判的に読み直しており、前二者同様、とても新鮮な発表であった。

三日目の夕刻からは、ネイティブアメリカンの詩人であるグローリア・バードとマリルー・アウィアクタによる詩の朗読が行われた。特にチェロキー出身のアウィアクタの朗読は、非常に感動的であった。彼女は、一冊の本を手に持ちながらもそれを閉じたまま、じぶんのことや家族のこと、部族のことなどについて話し続け、朗読を始める気配が全然なかった。しかし、彼女の話が、30分、40分と続いたときに気づいたのは、朗読するはずの詩が暗記されており、そのいくつかが、彼女の延々と続いてきた話の中に、既に埋め

ネバダ大学と広島大学、学部間協定締結

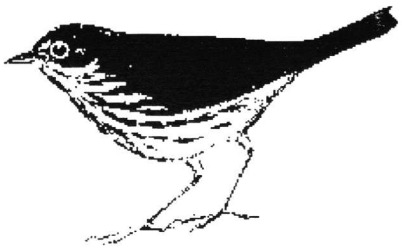
広島大学総合科学部とネバダ大学リノ校総合科学部は、地球環境問題研究や、外国語教育などを含む幅広い分野での研究教育実績と、研究教育交流を続けてきたが、1999年３月８日リノ校クラークホールで学部間協定締結の調印式をおこなった。ネバダ大学からは学長、学部長はじめ約４０人が、広島大学からは、国際交流委員のスケアー教授と、協定準備に当たった伊藤が学部長代理で出席した。

ネバダ大学リノ校は1873年に創立された「大学予備門」に始まり、規模拡大され、以後一世紀にわたってネバダ州の研究と教育の中心となってきた。なかでも、リノ校総合科学部は、１８の学科の幅広い分野にわたって顕著な実績をあげている。1995年、現在同大学「環境芸術と人文学研究センター」所長のS.スロビック氏が来日した際、広島大学総合科学部との研究者の交流や学術情報交換を打診したことから交流が始まった。1996年には、伊藤がネバダ大学リノ校を訪問し、S.スロビック氏をはじめ同校国際交流部スタッフとも会い、当地で開催された大会にも参加して、交流を深めた。

今後両総合科学部は学際の見地に立ちながら総合的に世界の諸問題を解明する共同研究や、文学・語学教育法の交流を含む幅広い研究交流を行うとともに、留学生交換や短期留学制度の適用などの教育交流を実施する。なおリノ校付属の「砂漠研究所」も、多くの実験室を持つ環境科学施設で、世界の研究者にプロジェクトを呼びかけている。（伊藤詔子記）

込まれていたのである。その結果、彼女の詩は、語りと切り離されることなく、一つのストーリーのなかに生きていたである。彼女の語り口も、ユーモアが溢れ、聴衆の集中力も途切れることなく彼女に引き付けられていた様である。

最終日の午前中、今回楽しみにしていたセッションの一つ、9.4「環境文学を教えるための実験的な方法」には、かなりの聴衆が集まった。自然破壊そのものは、科学がより論理的・実証的に示すが、しかし、審美的・道徳的・精神的な自然の価値は、文学を中心とした人文科学によって効果的に訴えることができる。そして、両者が学際的に取り組むことで、社会に積極的に関わっていく形での環境教育が成り立つのであろう。どの発表者もいろいろな形で学際的環境教育を実践していたけれども、共通して強調していたのは、それぞれ自然を経験しながら、地域に根ざした形で、いかに積極的に環境運動に貢献していくかということであった。



Ovenbird

最後の全体会「エコクリティシズムの方向」は、今後のアズリー学会に大きな方向転換を迫ったように思われる。特にレイチェル・スタイン、グリータ・ガード、そして、アダム・スウィーティングらが中心となり、今回を含めてASLE学会の運営、役員構成、そしてプログラム編成において、いかに多文化主義的な視点が欠如しているかを訴え、更に次回の役員選出において、女性を含めること、発表募集の際に多文化主義的な視点を差別しないことはもちろん、その視点からの発表を積極的に募集すると明示すること、更に開催地について地域的な多様性も考慮に入れること、などを要求した。たしかに運営側が女性、人種、ゲイレズビアン問題に積極的に取り組むことは重要であろう。しかし、それは同

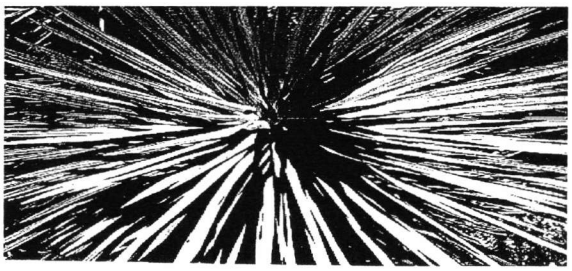
時に研究者側の責任でもある。そして、この問題は、同時にアジアン・ネイチャーライティングに突きつけられた問題でもある。

顧みて、今回のアズリー学会のタイトル"What to Make of a Diminished Thing"を日本語に訳そうとするとき、単に消えてしまった自然を「理解する」や「表出する」では不十分であろう。例えば、どれだけ消えてしまったものを再生させるか？　いかにして消えてしまったものを後続の世代に受け継いでいくか？　更に、どのようにして、消えてしまわないように訴えていくか、どう具体的に活動するか、そして、いかなる責任をもって、いかに生きていくか？　といった様々な問いを多義的に含むように思われる。もちろん、このタイトルの多義性は、今大会の参加者の多様な発表によってある程度実証されているが、しかし、この多義性あるいは多様性は、なお問題をかかえている。たとえば、ネイチャーライティングは、未だ「アメリカン」ネイチャーライティングを暗示し、また、スタイン、ガード、そして、スウィーティング等が問題を提示したように、多文化主義の自律性は、学会の学問、教育、そして、運営において、まだまだ確立されてはいない。つまり、ここでも"What to Make of a Diminished Thing"が問われなければならないのだろう。

開催日時の都合上、日本からの参加者が少なかったのは残念であるが、次回の学会にはぜひ多くの参加者を日本から期待したい。また、同時に、この9月に行われる日本アズリー大会が、日本だけでなく、世界各地からの参加者を引きつけることを期待している。本大会プログラムを照会していただくと明らかなように、ここに概観したのは、ほんの一部に過ぎない。以上の報告で、参加者の多様な発表とこの大会の価値や意味を伝えることが出来たであろうか？　望むらくは、これからのわれわれの人生や教育・研究にわずかでも資することが出来ればと願っている。

[UGA便り]

Mary Austin の家


Joshua-tree

6月末カリフォルニアで日系アメリカ人作家に会ったついでに、Sierra Nevada 東部のOwens Valley にあるManzanar の日系人収容所跡を訪れたところ、最寄りの町Independence で偶然にもMary Austin の家を発見しました。California State Park Comission によってHistorical Landmark No. 229に指定されており、家の前に*The Land of Little Rain*のPreface の最後の文章（But if ever you come beyond the borders as far as the town that lies in a hill dimple at the foot of Kearsarge, never leave it until you have knocked at the door of the brown house under the willow-tree at the end of the village street, ...）を刻んだ石碑が建っています。

侵入してみたら、庭には畑らしい跡がありましたが、現在は空き家らしく、二階づくりで切妻がいくつかあるごく普通の家屋でした。柳の木はありましたが、外壁は新しくなっています。しかし、その石碑の引用にもあるように、まさにSierra Nevada （頂上付近にはまだ多くの雪渓が残っており、Onion Valley という中腹まで車で行ける道路を登ってみました）とInyo Mountains に挟まれた窪地の砂漠に、ひっそりと息づいているような佇まいには、Austinの文章を彷彿させるものがあります。6月初めのKalamazooでのASLE大会後の加藤さん、上岡さんと同行した旅行と併せて、お陰様でこのひと月でMuir, Leopold, Austin と三人もの代表的なAmerican nature writers ゆかりの地を訪れることが出来て、感慨深いものがあります。別な日にはDeath Valley にも足を伸ばし、Mojave Desertを実感することも出来ました。いずれまた、この辺についてもいろいろお教えいただければと願っております。　**石幡直樹**（東北大学、UGA滞在中）

Dame Gillian Beer講演 （日本英文学会大会特別講演 4月30日、松山大学）

"Waves, Atom, Dinosaur, Woolf's Science" ［要約］

伊藤　裕子（名古屋大学大学院研究生）

Virginia Woolf が当時の科学思想に対してどのような態度をとっていたかについて主に彼女の晩年にかけての書物から分析が行われた。特に20年代、30年代の宇宙物理学者として著名な James Jeans と Arthur Eddington らの書物は当時の最先端の科学として今まで認識されなかった新しい壮大なスケールの空間を表現する新しい言語を模索したことから、言語及び認識論の再構築につながったが、彼らが表現する新世界とその背後にある進化論的思想は少なからず当時の文筆家達の間に議論を巻き起こした。例えば、William Empson は、そうした科学思想による世界の書き替えを可能にしたのはその思想がすべての物事はあらかじめ設定されているという決定論に根ざしているからであるとし、詩もまた同じ決定論に基礎をおくのだと述べ、当時の科学を高く評価した。

それに対し Woolf は権威づけられた科学をまのあたりに信奉するのではなく、独自の観点から決定論とは反対の立場、すなわち、運命は決定されているのではなくすべては変動するという考えを持っていた。科学は彼女にとって満足し難い非現実的な世界の表現であるが、科学の新しい世界を表象する言語は「いかに個々の生を記述するか」という彼女の個人的な課題に対して、恰好のメタファーを与えてくれるものであった。例えば Jeans による「私達は波によって構成された宇宙に生きている」という表現は小説 *The Waves* の創作に影響を与えたことであろう。また、当時の科学が記述した微小なものから宇宙にいたるまでの壮大なスケールや、すべてのものはすべてのものに関連しているという考え方などは、彼女の手にかかるとメタファーとして人間関係の記述の中に取り込まれることになる。その中でも Woolf とEddington に共通する現実観は、目の前の固体あるいは現実は頭に投影された幻想にすぎないという考え方あり、それは特に *The Waves* に反映されている。

Apatosaurus

Woolf は科学者のパラダイムの中にいたわけではないが、生を見つめる視点から小説と科学との新しい関係を築いたといえる。彼女は当時の科学を引用しながらも進化論的思想とは矛盾する点を小説に盛り込んでいる。*The Waves* における登場人物 Barnard による語りではもはや目的論的に先のプランが存在しない、言い替えれば進化論が通用しない状況の中で、いかに物語を作るのかという問題に直面する。そのような進化への懐疑がもたらすのが Woolf の語りであり、この小説のような６人の語り手が複層的に語る新しい物語の連続性、あるいは独自の世界観である。さらに最後の小説 *Between the Acts* では進化が明らかに悲観されている。この時点ではもはや脳の記憶が現実を作り上げているという考えには否定的な態度を示し、大戦という現実を科学がもたらした発明の帰結としての人間による破壊的行為とみなし、太古からの歴史の進行を悲観的にとらえた。科学の時代にあって、彼女の文学的行為はそれを攻撃し、科学の価値の対極にあると彼女が考える人間の価値や経験を重視した。

*Literature of Nature*を読む

―エコクリティシズム研究会報告

辻　和彦（広島大学大学院）

4月4日、広島大学総合科学部においてエコクリティシズム研究会が行われた。今回取り上げたのはPatrick Murphy教授編集による『自然の文学』(*Literature of Nature: An Internatinal Sourcebook*. Fitzroy Dearborn Publishers, 1998)である。『自然の文学』は490ページにも及ぶ大著で、様々な分野のスペシャリストによる多種多様な論文から構成されている。日本からも山里勝己、生田省吾、秋山健、Bruce Allen、木下卓、太田雅孝、高橋勤、加藤貞通、赤嶺玲子といった堂々たる面々が編集、執筆陣に入るこの論文集が、まだまだ歴史の浅いエコクリティシズム史に一つの巨大な道標としてそびえ立つことは間違いあるまい。六つのセクションに分かれ、それぞれ「アメリカ合衆国とカナダ」、「ヨーロッパ」、「アジアと太平洋」、「アフリカとアラブ世界」、「ラテンアメリカと両極」、「トピック、ジャンル、理論など」と題されている。

第一セクションでは、Rochelle JohnsonとDaniel Pattersonによる「初期アメリカにおける自然についての著述」から、野生動物をテーマとする文学作品を論じるRalph H. Luttsの「写実主義の野生動物物語」まで、北米大陸を中心と十五本の論文を検討した。その中で特に出席者達の目を引いたのが、F. Marina Shaufflerの「地球との対話」である。ecological awakeningsがどのようにして起こるのかを説明するこの論文には、実体験がない者には分かりづらいとの意見も出た。伝統や古い歴史という頼るべき絶対権威の存在感が薄いアメリカにおいて、ネイチャーライティングを含む広義のエコロジー運動というものが一種の宗教として機能しているのではないかという伊藤のコメントには一同肯かされた。

第二セクションではイングランド、アイルランド、スコットランド、ウェールズの各々のネイチャーライティングを論じた論文が紹介された。第三セクションでは韓国、中国、台湾、インドに関する論文の要約発表がなされ、第四セクションではアフリカとアラブ世界、第五セクションではブラジルとアマゾンに関する論文がそれぞれの担当者から要約紹介された。また第六セクションの部分では、ジャンルや文学理論とエコクリティシズムの関係を論じた論文数本が紹介された。

このような世界の広範囲なネイチャーライティングの歴史とそれについての問題を知ることができて非常に貴重な体験をしたという意見が大半を占めたが、中にはともすればネイチャーライティングの歴史が非常に浅い、あるいはそれが根付いていない地域まで取り上げられ論議される必要が果たしてあるのかという鋭い意見も出された。もちろんこうした地域による分類の仕方については、仮にどのように分類され問題提起されていても必ず不満を持つ者はでるであろうし、またこれだけ多くの論文が揃っている以上、各論文の間に多かれ少なかれ力量の差がでていることも仕方あるまい。だが少なくとも英語圏の読者が英語圏以外のネイチャーライティングの歴史とエコクリティシズムの動向を知ることができるというこの本の持つ最大の業績は、やはり誰にも否定できないであろう。

結果として確認できたのは、アメリカのネイチャーライティング並びにエコクリティシズムに関する多種多様な動向、また世界のアメリカ以外の地域の環境と文学の関係に関する研究が予想外の早さで進んでいることのではないかという認識であった。

研究会終了後には『緑の文学批評』の出版祝賀と三月中旬から入院していた伊藤の退院記念も兼ねて、ささやかな飲食の会が持たれた。次回の研究会は九月に予定されているが、次はネイチャーライティングのテクストを読もうという大筋の意向以外は詳細はまだ決まっていない。さらなる多くの方々の参加と企画提案をぜひ歓迎したい。（文中敬称略）

第１回水俣病記念講演会

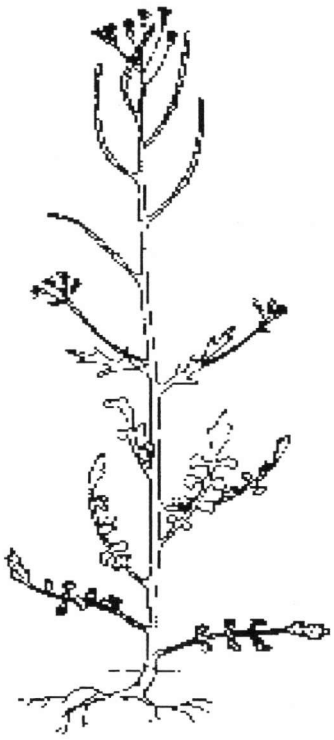
－私たちは何を失ったのか、どこへ行くのか

赤嶺　玲子

４月２９日、有楽町マリオン朝日ホールで、第１回水俣病記念講演会が開催された。1996年に開催され、大きな反響を呼んだ「水俣・東京展」を機に発足した、水俣フォーラムが主催したものだ。水俣病公式発見の日である5月1日を記念し、「水俣・東京展」の後をうけて記念講演会を毎年開催することになり、第１回目は「私たちは何を失ったのか、どこへ行くのか」という副題を掲げて講演会が行なわれた。700人収容の会場は満員になり、広い年齢層の水俣病への関心の高さがうかがわれた。

栗原彬による主催者あいさつに始まり、荒木洋子（水俣病患者）「私の水俣病」、筑紫哲也（ジャーナリスト）「１９９９年日本ー水俣から学ぶために」、網野善彦（歴史学者）「海の復権ー日本社会再考」、石牟礼道子（作家）「形見の声」といった講演の後、各地の水俣展の紹介や、映画「水俣病ーその30年」の上映が続いた。

荒木氏は、水俣病闘争のこと、水俣の共同体の様子などについての興味深いエピソードを、主婦、運動家の立場から語った。筑紫氏は、水俣病問題にみられる行政の閉塞性や、それに対する市民の闘争運動から、21世紀の日本社会、とりわけ若い世代が何を学べるかなどについてユーモアをまじえて話した。網野氏は日本の歴史において漁民がどのような位置づけをされてきたかという論点から、水俣病患者の疎外の問題を検証した。網野氏の研究は、一般的に近代、とくに戦後の問題と考えられてきた水俣病を、日本有史以来の長い時間の幅を持つ問題としてとらえ直した、非常に斬新なものに思われた。



Spring cress

私がとくに興味を惹かれたのは、講演者のなかで一番かぼそく、うたうような抑揚をもつ声をした石牟礼氏だった。石牟礼氏は、近年出版した小説『天湖』のモチーフの話などをまじえながら、ダムの水面から葉をつけた枝の先端をのばす沈められた樹を見て、強いインスピレーションを得たことや、人間の魂について語る水俣の人に対して、魂など存在しないと言う東京の人々のエピソードなどを語った。作家として水俣病を日本社会に知らしめ、水俣病闘争を精神的に支えてきた人の話す言葉は、水俣病が抱える社会問題、闘争などといったことよりも、さらに基本的で奥深い、この地上で生きるということを語っているように思われた。石牟礼氏がこうした生命の基本に根ざしたところから言葉を発しつづけてきたことは、水俣病が高度経済成長期に起こった社会問題という枠を超えて、環境と人間の関わりという現代的なテーマについて日本人に深く考えさせる契機となったことに重要な貢献をしているように感じられた。

多様な立場から語られた講演会は、日本社会のさまざまなひずみと環境問題が複雑にからみあった水俣病を、多角的に提示したものだった。講演者が共通して持っていたテーマは、水俣病が示す諸問題を鍵にして、これからの日本社会の方向性を模索しようとする試みだったように思う。環境問題と人間存在の関わりが深刻に議論され始めたこの時代に、水俣病記念講演会はこれからますます意義深いものになっていくだろうという予感を持った。

「文学と環境」投稿規定

会誌「文学と環境」第３号の原稿を募っています。第３号から投稿規定を大幅に変更していますので、投稿を希望される方はご注意ください。

1. 内容：文学と環境に関する未発表の研究論文・書評等（和文または英文）
2. 枚数：

(a)和文の場合、Ａ４判用紙に横書きで４０文字Ｘ３０行とし、１０枚以内。英文のレジメ１枚（１ページは65ストローク×25行）を付すこと。

(b)英文の場合、Ａ４判用紙にダブルスペースで２０枚以内。１ページは65ストローク×25行。和文によるレジメ１枚（４０文字×30行）を付すこと。

書評：和文の場合、横書きで４０文字Ｘ３０行とし、３枚以内。英文の場合、３枚以内（１ページは６５ストロークＸ２５行）

3. 体裁：表紙に題と氏名、所属先、連絡先（Tel、E-Mail番号等）を記入のこと。注は本文の終わりにまとめること。

その他、*MLA Handbook for Writers of Research Papers: Fourth Edition*もしくは『MLA英語論文の手引き第４版』（北星堂）に準ずる。すでに口頭発表した場合は、その旨を末尾に記すこと。

4. 提出部数：５部（コピーも可）とフロッピーディスク（機種名、ソフト名を明示のこと）。
5. 宛先：編集事務局（〒780-8520 高知市曙町2-5-1

高知大学人文学部　上岡克己）。

封筒に（『文学と環境』応募原稿）と明記すること。

6. 締切：第３号の締切は2000年３月20日とする。期日厳守。
7. 採否：編集委員会が行う。
8. その他：

(a)投稿資格は会員とし、投稿は１名につき１編とする（編集委員が依頼する場合は会員でなくともよい）。

(b)提出された応募原稿は返却しない。

(c)和文の場合、題名には英文タイトルを、また執筆者名にローマ字表記を付すこと。

(d)書評を除き、原則として執筆分担金は仕上がり１ページにつき2000円（大学院生は1000円）とする。

会誌編集委員会

Where You At?

A Bioregional Quiz

生態地域度クイズ

Developed by Leonard Charles, Jim Dodge, Lynn Milliman, and Victoria Stockley.

1.Describe exactly where you live. Draw a map if you like.
2.What watershed do you live in? This means your own personal watershed.
3.Name five trees in your area. Which ones are native?
4.Name the nearest mountain peak to your home. What direction is it? Can you see it from your house?
5.Name five resident and any migratory birds in your area.
6.How long is the growing season where you live, i.e., on what dates (approximately) would you expect the first and last frosts of the year (32∞F or less)?
7.Trace the water you drink from precipitation to tap.
8.Where does your garbage go? Include recycled and non-recycled portions.
9.What primary geological events/process influenced the land form where you live?
10.What was the area you live in like 50 years ago? 100 years ago?
11.Name some beings (non human) which share your place. Include both wild and domestic beings.
12.What energy costs you the most money? Include gasoline for car, etc. If utilities are included in your rent, make estimates for each type of energy.
13.Name the three lakes nearest your home.
14.Name the nearest creek or stream to your home, and trace its passage from source to outlet. Include above and below ground portions.
15.What is the closest wilderness area to where you live, i.e., state, local or federally designated wilderness refuge or park?

Include with your answers a list of references to indicate where you obtained your information.

（作者ジム・ダッジ氏の許可を得て生態地域度クイズを原文のまま掲載します。答えてみて下さい。翻訳の許可も得ていますが、むしろ日本の自然条件に合わせて翻案したいクイズです。次のURLに掲載されています。
http://prime.bcc.ctc.edu/homepages/CB/Bio100/html/bioreg.html

芦澤一洋展二つ

1. 山梨県立文学館に芦澤一洋コーナー

山梨県立文学館では開館10周年を記念して、「山梨の文学—21世紀へ—」題する記念展を開催することになり、ASLE-Japanのメンバーでもあった故芦澤一洋氏のコーナーも設けられることになりました。芦澤氏は山梨県出身。ネイチャーライターとして活躍するかたわら、早くからアメリカのネイチャーライティングに注目、また、日本のネイチャーライティングの発掘・紹介にも先駆的役割を果たされました。没後３年目を迎え、芦澤氏の業績を再評価しようという気運もいよいよ高まりつつあります。秋に刊行予定のASLE-Japanの機関誌「文学と環境」にも芦澤氏の遺稿が掲載される予定ですし、もしも開催期間中に山梨方面にお出かけの節は山梨県立文学館にも足をお運びいただければ幸いです。(大神田)

期　日：1999年10月3日（日）～2000年1月30日（日）
場　所：山梨県立文学館
〒400-0065甲府市貢川1-5-36　Tel: 055-235-8080

2.「芦澤一洋の世界---日本にアウトドアライフを紹介した世田谷在住の作家」

期　日：1999年7月1日～9月30日
場　所：群馬県川場村、世田谷健康村、中野ビレッジ　［入場無料］
生前のパネル展示、全著作の紹介、使っていたバックパッキング、フライフィッシング道具の展示。
問い合わせ：Tel: 0278-50-1144　「森のむら、森の学校」まで。
(山と渓谷社『OUTDOOR』編集長、森田洋さんより)

Rhubarb

＜多様な専門分野の連係＞21世紀を生きる人々へ

人文科学・社会科学・自然科学の研究者による『科学技術と環境』が出版されました。「専門以外の分野に幅広く目を向ける姿勢こそ、21世紀を生きる人々に要求される教養ではあるまいか。」と序文にある。その言葉を実現するため「自然と人間のかかわり」「科学技術の発展---その光と影」「地球規模で考える」の３部、３７章に区分された環境についての論考を縦横に結び付け、どの部分の関心からでも入っていけるように工夫がこらされている。

本書は広島大学総合科学部などの教官23名による出版。全国の大学教育を揺さぶり続ける教養部解体・改組の嵐の中で「総合的」「学際的」という用語は今や空虚に響く程に多用されてきた。しかし本書のような中身も熱意もある「総合」への試みは、やがて実を結んでいくであろうとの希望を抱かせる。ASLE-Japanのメンバーでは伊藤詔子さん、成定薫さんが執筆に参加し環境と文学を論じておられる。（市川浩、小島基ほか共編、『科学技術と環境*Liberal Arts in the 21st Century*』培風館、1999年２月刊）

書誌情報

和書

◆天野礼子、伊藤孝司（写真）「川は生きているか」（岩波書店、1998）（加藤）

◆天野礼子「川よ」（NHK出版、1999）（加藤）

◆五十嵐敬喜、小川明雄「市民版　行政改革—日本型システムを変える」（岩波新書、１９９９）（加藤）

◆石牟礼道子『形見の声　－　母層としての風土』（筑摩書房、１９９６）阿蘇山系の深い森、九州の自然のスケッチ、与那国島紀行、天草の物語について、水俣共同体のなかのユーモラスなエピソードなどのエッセイを集めている。概念ではとらえられない風土とは、魂とは、そして声とは何かを考えさせられる。うたうような魅力的な文章。（赤嶺玲子）

◆思川開発事業を考える流域の会編「真の文明は川を荒らさず—-水と環境から思川開発を問う」（随想舎、1998）（加藤）

◆半村良「ガイア伝説」（主婦の友社、１９９９）（加藤）

◆２１世紀環境委員会「巨大公共事業」（岩波ブックレット476）（加藤）

洋書

◆Cohen, Michael P. *A Garden of Bristlecones: Tales of Change in the GreatBasin*. (Reno: U of Nevada P, 1998) Ecocritic として常にこの分野に新しい方向性をみせてきたCohenのBioregionalism的な試み．(山城新)

◆Dillard, Annie. *For the Time Being*. (New York: Random, 1999)Dillardの久々の小説．おそらく今までＤｉｌｌａｒｄの作品には馴染みの題材である，theologyやspiritualityがこの作品でも際立っている．（山城）

◆Meyers, Amy R. W., ed. *Art and Science in America: Issues of Representation*. (San Marino, CA: Huntington Library, 1998)　科学と芸術の関係がどのようにアメリカの環境に影響を与えてきたか？特にAudubonとその作品をめぐる考察は非常に新鮮．（山城）

◆Pyne, Stephen J. *How the Canyon Became Grand: A Short History*. (New York: Viking, 1998) テーマの割に160ページの内容には少し物足りなさを感じるけれども，副題にあるように，グランドキャニオンの歴史を概観するにはお手ごろな本．特にClarence Edward Duttonについての論議はPyne自身の作品とかなり共通項があるように思える．（山城）

◆Sanders, Scott Russell. *Hunting for Hope: A Father's Journeys*. (Boston:Beacon P, 1998) Sandersが息子と口論を出発点にして，作家として，親として，いかにこの環境の危機的な状況において「希望」を模索し，見せてあげられるか？　アメリカのプラグマティズムの伝統を想起させる．（山城）

◆Stein, Rachel. *Shifting the Ground: American Women Writers' Revisions of Nature, Gender, and Race*. (Charlottesville: UP of Virginia, 1997) Emily Dickinson, Zora Neale Hurston, Alice Walker, Leslie Marmon Silkoの作品を通して「自然」「人種」「女性」を論じながら，際立って斬新にアメリカの"Nature's Nation" 神話を解体する．（山城）

◆Berger, Bruce. *The Telling Distance*. (Tuscon: University of Arizona Press, 1990) 沙漠のバルネラビリティに焦点を当てつつ、その不思議さについて様々な角度から分析する．(高橋守)

◆Limbaugh, Ronald H. *John Muir's "Stickeen" and the Lessons of Nature*. (Fairbanks: University of Alaska, 1996) おなじみロン・リンボウ先生が、ジョン・ミューアの描いた有名な犬スティッキーンの謎を解明している．(高橋)

◆McDougall, John. *McDougall Plan*. (Clinton, NJ: New Win, 1983) 医師ジョン・マクドゥーガルが、豊かなアメリカの食事が原因で起こる癌、心臓病、糖尿病等について解説し、正しい食事法を指導する。肉食・魚食系アウトドア派は必読．(高橋)

◆Reid, Robert Leonard. *America, New Mexico*. (Tuscon: University of Arizona Press, 1998) 現代のニューメキシコ州の風景を探求しつつ、昔の西部の人々についての面白い歴史的な事実を紹介する．(高橋)

ASLE-Japan/文学・環境学会

第５回全国大会開催のお知らせ

今年度は新しい方式により、以下の要領で開催する予定です。エクスカーションではネイチャーゲームを取り込んだ遠出を企画中です。講演には詩人・作家の三木卓氏をお迎えして、文学における自然の位置の問題などを中心にお話をうかがう予定です。

また、ラウンドテーブルではフロアとの活溌な議論を交わしたいと思います。日程的にかなり余裕があるため、休憩時間を活かして相互交流を深める場ともしたいと思います。ご参加をお待ちしております。

（詳細なプログラム、エクスカーション案内、懇親会案内などは8月上旬にお届けします。）

日時：1999年9月10日（金）～12日（日）

場所：場所：立教大学　武蔵野新座キャンパス

〒352-0003埼玉県新座市北野1-2-26

（東武東上線志木駅下車：池袋より急行で25分）

第1日目　9月10日（金）エクスカーション＆ネイチャーゲーム

第2日目　同 11日（土）

午後1：00　受付開始・開会

1：30-2：00　総会

2：00-3：30　研究発表　第1部

30分休憩

4：00-5：30　講演　三木卓氏

（詩人・作家）

30分休憩

6：00-8：00　懇親会

White Oak

第3日目　同　12日（日）

午前10：00-12：00　研究発表第2部　ラウンドテーブル

「環境文学と環境教育」岡島成行、稲本正

昼食

午後１：30-3：30　シンポジウム「幻想としての自然」

生田省悟、石井倫代、野田研一

注意：会場では例年通り「展示室」を設けます。会員の方々で絵画・写真・ヴィデオ、著作などの作品の展示をご希望の方は至急事務局までご連絡下さい。

事務局：立教大学　観光学部 〒352-0003　新座市北野1-2-26

◎事務局より

1）全国大会開催方式の変更について

全国大会は、1995年以来、京都、札幌、東京、広島と開催してきましたが、これまでの開催方式は日本アメリカ文学会全国大会の直後にその開催地で行うというものでした。が、プログラム内容の複雑化や会員数の増加、あるいはアメリカ文学会前後の他学会との日程調整、開催地における運営責任者の問題などから、かねてより開催方式の変更を求める声が役員会内部でありました。そのような状況の変化を踏まえて、本年5月に開かれた役員会（松山）において、今年度大会以降、試行的にアメリカ文学会との「同時開催」と単独の「独立開催」の二つの形式を隔年で併用することと決定いたしました。その結果、本年度は別掲案内のような日程、場所で開催を計画中です。初の「独立開催」となります。皆さんのご協力をお願いいたします。

2）1999年度スケジュール

7月上旬　ニューズレターNo. 8　発行
9月10日（金）～12（日）
　ASLE-Japan/文学・環境学会第5回全国大会
9月中旬　会誌『文学と環境』第2号　発行

3）99年度会費納入について

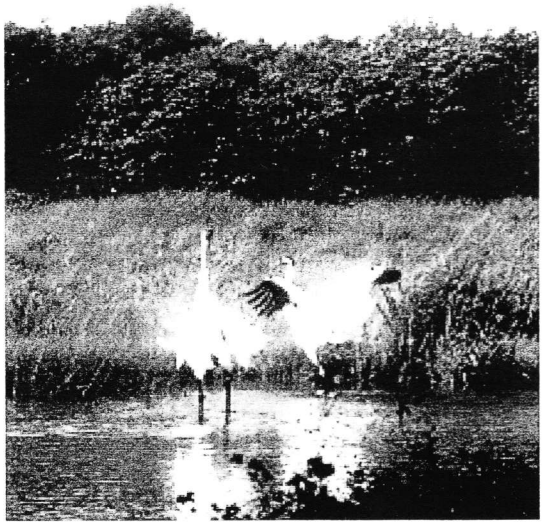
今年度会費未納の方は、すでにお送りいたしました振替用紙にてご納入下さい。今年度から一般会員の会費が値上がりしました。くれぐれもご注意下さい。なお、ASLE-Japanの運営はすべて会費によって賄われております。どうぞよろしくお願いいたします。

年会費　一般　¥5,000
学生　¥2,000（据え置き）

4）出版関係の会員の方々へ

別掲の要領で全国大会を開催いたします。会場では展示室を設けます。関係書の展示ご希望の方は、至急事務局までお申し出下さい。

POSTSCRIPT



Whooping cranes

♣　沢山の記事を御寄稿頂き、お陰さまでニューズレターNo.8を16頁構成で発行することが出来ました。御協力くださった皆様に感謝します。編集をバトンタッチしたばかりなものですから、全般に初歩的なところが目につくことでしょう。本人は編集ソフトの物珍しさにつられて6月後半はたっぷり遊ばせて頂きました。

♣　前半は7頁の［UGA便り］にある通り、ASLE大会の後ウィスコンシン州マディソンの北方でミューアの大好きだった湖や、レオポルドゆかりの小屋、それから藤前干潟保全の過程におけるご助力にお礼を述べるため国際つる財団(ICF)を訪れたりしました。楽しい旅でした。上掲鶴の写真御参照。万葉集２７１番を書き添えます。

桜田へたづ鳴き渡るあゆち潟
　潮干にけらしたづ鳴き渡る――高市黒人　(KT)

ASLE-Japan
文学・環境学会
Newsletter No.8
1999年7月4日発行

【発　行】
ASLE-Japan／文学・環境学会
事務局：立教大学　観光学部
　　野田研一　研究室内
〒352-0003 埼玉県新座市北野1-2-26
E-mail: noda@rikkyo.ne.jp

【編　集】
編集代表　加藤　貞通
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
名古屋大学言語文化部
Tel. & Fax: 052-789-4188
E-mail:h44558a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp